

「ほほえみの地域づくり」の泣き笑い ～青い森のほほえみプロデュース活動奮闘記～



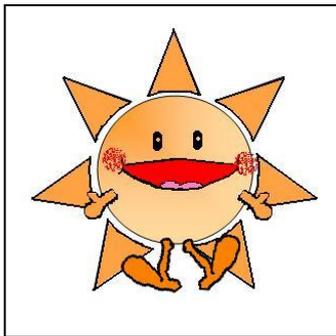
(5)

山本菜穂子

今回は、コア笑いプロデューサーがどうやってこの取組のリーダーになっていったか、について書きたいと思います。

そして同時に、一つ一つはたいしたことではないかもしれないけれど、そこそこにちりばめられた、この取組が継続するために力を貸してくれた工夫についても。

本題に入る前に。小さな小さな工夫の一つとして、例えば、イメージキャラクターの作成です。一般県民を巻き込む取組ですから、イメージ戦略も大事だ、などという慣れない



ことを考えまして。(基本的に、県職員は本当にきまじめな行政マンの集団ですから、こう

いう事は苦手だな～と思うのです。企画部門にいる人たちは毛色が違うなど思うことはありますが、私、福祉部ですから。)で、イラストの上手な知り合いの県職員に個人的に頼んで描いてもらって。こんなにかわいらしい、イメージぴったりの「ほほえみ太陽くん」(私はそう呼んでいます)

すが実はオーソライズされていない。)ができました。これ、手や足や目や口のパーツを数種類つくってくれて、自由に組み合わせてみたらいいよ、と渡してくれたのです。喜んでいたり、照れていたたり、座っていたり、お辞儀していたり、側転していたり、といろいろなバージョンをつくって、チラシやパンフレット、ホームページなどを飾らせてきました。

このイラストをみたら「ほほえみだ」とわかる人も増えてきて。この子が愛され、この取組への愛着もちよっとは強まったかなと感じています。このイラストで缶バッジをつくって持ってきてくれる仲間が出てきたり。今、協会をつくってから、この「ほほえみ太陽くん」は活躍中です。

コア笑いプロデューサー 働く！

さて、ほほえみ太陽くんの笑顔をプレゼントしたところで本題へ。人材養成には二つの方向性がありますよね。一つは、まず初級講習を受講させその中から優秀な人材を中級者として育て、そこからさらに上級者講習を経て指導者にするというや

り方。そしてその逆と。「青い森のほほえみプロデューサー」に関しては、その“逆スタイル”の養成でした。まず、一番中心となる指導的立場に立ってもらう人をつくってしまい、その人達に裾野を拡げてもらう。私は、今回はそのことの効果は絶大だったと感じています。たった2年間で2万人を養成しようという計画を実践するためには。たぶん私たちが中心の人材として必要としたのは、指導者として、より多くの知識・技術をもった人ではなく、想いの強い人たちだったんだと思います。

コア笑いプロデューサーになった仲間たちは高柳先生の有無を言わせぬ要請により、それぞれの地元で開催される「笑いプロデューサー講習会」に参加することになりました。高柳先生の助手として。そこで、コアの仲間たちは、実際に人を育てるという経験をしました。そう、ほほえみ隊がやってきた「受講生の申込時のレポートチェック」から今度はコアがやるのです。「え～私たちの時にもこんなことをやってくれていたんですか?」「講習中も毎晩、その日のレポートを全部チェックして、一日のその人の言動を思い出しながら、翌日の配慮の必要性や方法を話し合ったりしていたんですね。」そうそう、そうなんです。コアのみんなは、今度は、配慮される側から配慮する側の体験をすることになったんです。そして、その時、コアの中には、配慮される立場だった時の、嬉しかった寄り添い、欲しかったことばなど

が思い起こされていきました。それが今度は「笑いプロデューサー受講生」への自分の態度を決めていきます。どんな配慮がどのように相手に響くのか、自分の体験を踏まえて、より深く、実感を伴って理解できる機会になったと思っています。一人一人を大切にすること、その **technique** ではなく、**attitude** を体得する貴重な体験であったと思っています。

ちょっと雑談です。私、大学時代心理学科に所属していたのですが、カウンセリングゼミで恩師であった小林純一先生に言われたことばで忘れられないのが、この **attitude** です。模擬面接を繰り返しながら、ただやみくもに来談者のことばを繰り返す私たちゼミ生に、とても悲しそうに「あなた達は本当に相手のことを判りたいと思っていますか。私が皆さんに伝えたいのは **technique** ではなくて、**attitude** なんですよ。」と言われたことがあるのです。私がそのことばの意味を深く正しく理解しているかどうかは自信がありませんが、対人援助の仕事をするに際し、私の中にはいつもそのことばがありました。小手先でなく、こころを込めて相手に向かおうとする姿勢そのもの、そのことがどんなテクニックの習得よりもその前に大切だということ。コアが笑いの講習の手伝いをしながら学んだことはその芯のところに近かったような気がしています。高柳先生もよく **technique** で

はないと言って教えてくれていましたっけ。

その大切な、そして微妙な感覚をつかむにはとても有効な講習方法だったと感じていました。

教えることで深まる知識

そして、知識などを身につけるには、人に教えることが一番！ですね。笑いの講習を体験するまで、コア笑いプロデューサー養成講習会の4泊5日で得たはずの知識や技術は、コアの私たちの中に混沌と詰め込まれた状態でした。それが、笑いの講習会でスタッフ側として入り、教える側の一員となって体験したことで整理されていくことになりました。

3日間の笑いプロデューサーの講習会は、だいたいこんな内容になります。1日目、まず、高柳先生からの講義で笑うことの効果などについて、医学的な知識も含めて教えて頂きます。その後、全員による自己紹介。これも研修です。相手の話をちゃんと聞くこと、自分のことを印象深く伝える方法を学びます。そしてコア笑いプロデューサーによる「ほほえみの7か条」の紹介。先程、人に教えることで知識が身に付くといいましたが、つまり、分かったつもりになっているだけでは結局人には教えられず、教えるためにはその知識を自分のことばで自分の中に取り込まなければならぬのですよね。コアは講習前日何時間もかけて高柳先生と打ち合わせし、7か条を1条

づつ役割分担し、体験談を交えたりしながら自分のことばで説明を試みました。1日目の最後はグループに分かれて、PNPやアイメッセージの事例を作成しながら理解していきます。グループには、コアが複数で入り、その作業をサポートします。

2日目は発声練習から始まります。人前で講習を行える人材の養成ですから。そして自分のよいところを見つめ直すワークショップを行います。同時に他者のよいところを探し出してことばにして伝える練習も行います。コアは机間巡視しながら、とまどっている人の側でその過程に寄り添い、いいところ探しの手伝いをします。この寄り添い方も相手を大事にする *attitude* が試される気がしていました。そして次が、言うべきことをメリハリよく、大きな声で届かせる練習。その後、翌日の最終日にグループでほほえみの7か条を発表するための準備にかかります。ここにも各グループにコアが入ってサポートします。

3日目は、グループごとにほほえみの7か条を伝えるための模擬講習発表です。それぞれの発表には、高柳先生やアシスタントの先生からのコメント(ダメだし?)。そして改善してやり直し。全てのラストは、コアも笑いも一緒に輪になった、一人一人、この3日間の感想を発表します。

コアはこの3日間、自らの発表をしながら、グループのサポートをし

ながら、実は、迷い、考え、行動し、迷い、考え・・・を繰り返していたのです。これらがコアにとっての第二弾の講習だったんですね。この時のコアの仲間の感想です。

「4泊5日で詰め込んだものを前よりも深く理解するチャンスになった3日間でした。」「弘前会場の笑いプロデューサー養成講習会は参加者44名。そこに15名ものコア笑いプロデューサーがサポートに駆けつけました。私たちのサポート、我ながら見事でしたよね。笑いプロデューサーの皆さんが、3日間でどんどん変化していく様子を感じ、ついこの間までの自分たちを見る思いがして、嬉しい驚きでした。」

感謝を伝え、感謝される体験

この人材養成の仕組みにはもっともっと、私たちがこの取組を継続できるための重要な鍵が隠されていたと感じています。その一つが「感謝し、感謝される体験」です。ここでも高柳先生のアイデアが。笑いの初回講習の前日、ほほえみ隊は、講習会場の壁全面に紙を貼れるように工夫して欲しいと言われました。(実際、いろいろな会場がありますから、その注文に応えることもたいへんでした。)受講生は開講日に受付をすますとその“壁に貼るための用紙”をもらいます。(その紙にも中央に「ほほえみ太陽くん」をプリントしたので、壁はかわいいイラストで埋め尽くされて、殺風景だった会場が明るい雰囲気になりました。それも先生の

狙いです。)そこに自分の名前を書いて壁の好きなところに貼るんです。講習中ずっとそれは貼られています。そして、休憩時間になると、コアやほほえみ隊、そして受講生相互に、そこにメッセージを書き込むんです。そこには、一人一人の言動への気づき、感謝、感動が記載されていきます。コアはすでにほほえみの7か条を学んだ面々です。相手の良いところを見つけてプラス評価で伝えるという訓練をしてきて、下手くそでもそのことの重要性を理解し、実践しようとしている仲間です。紙にはいっぱい受講生一人ひとりへのプラスメッセージが書き込まれることとなります。そして、講習最終日には笑いプロデューサー講習会の修了証と一緒に「自分のいいところ」がたくさん書かれたその紙を持って帰るという仕組みです。

そしてそれは受講生分だけでなく、コア笑いプロデューサーの分もあるのです。そうです。迷いながら必死にサポートを続けてきたコアの仲間たちに、受講生からの感謝のことばがたくさん伝えられたのでした。「あのときの一言が嬉しかった。」「あなたが話してくれた体験談に感動した。」「笑顔に励まされた。」というような。

誰かの役に立てる！その喜びに、コアの瞳がさらに輝きを増した体験だったと思います。

「誰かに感謝される取組であること。」そのことがこの活動が継続されるための大きな原動力であることを、

私は、やっとそのころ薄々感じ始めていました。謝礼金も払わない、交通費すら出ない、でもみんなでこの取組を続けるためには、目的に意義を感じているだけでなく、そこに自分がこれをやっていて楽しいと感じる何かがないと。その何かになりうるのが、受講生からの感謝であると。

笑いプロデューサー養成講習会では、受講生からこんな感想が残されました。「苦しいとき、悲しいとき、自分だけでは立ち直れないとき、人のほほえみで助けられたことがたくさんあることを思い出した。この講習会で自分に自信がついた。できれば近くから、できれば遠くまで皆さんにほほえみをあげたい。」「高柳先生の本気が嬉しかった。そしてスタッフとコアの一生懸命さがとても伝わってきた。」「これまでは自分のために笑っていたが、相手のために心からの笑いがあるということを感じた。」「自分を嫌いな人間が周囲を幸せにはできないと改めて感じた。」「笑いといえど心がスカッとするものと思っていたが、講習を受けて、心をあたたかくする笑っていいものだなと思った。」

笑いプロデューサーの投書

この頃から、私たちのこの取組は新聞の投書欄を何度も飾ることになります。受講した笑いプロデューサーの皆さんが、その体験や感動を投書してくれたものです。体験した県民が「これは良い取組だ、一緒にやりたい。」と言ってくれる。それはと

ても嬉しいことでした。

雑誌、テレビ、新聞などからの取材を受けることも出てきました。でも、全国でも例のないこの取組を理解してもらうことが、私に上手にできず、結果として取り上げられないということも数多く経験してきました。(NHKが一番困難だったかな。別々の支局から3回くらいアプローチがあって、それぞれ丁寧に時間をかけて対応して、結局一度も使われたことがなかった。一度は撮影スケジュールもたてたのにドタキャンされた。まあ、いいんですけど。(^^)v ちょっと恨み節?)取材を受けていると、時には、「笑うと虐待しなくなるんですか?」と問われたり、「虐待する人をどうやってこの講習に引っ張り出すんですか?」と言われ首をかしげられることもありました。「これはポピュレーションアプローチである」ともっとちゃんと伝えられれば良かったんでしょうが、そのころは今よりもっと説明が下手くそだったと思います。でも、取材は誠意をもって受け続けました。どうしてって。

ひとつは、そうやって取材を受けることで、この取組を広くわかりやすく知らせるために、何をどう伝えたらいいのかを勉強させてもらうことができたから。そしてもう一つは、たとえ3つ取材を受けて1つしか掲載されなくても、それが好意的記事になってみんなの目に触れることになれば、広報の意味合いだけでなく、コア笑いプロデューサーや笑いプロ

デューサーの仲間たち、そして、事業担当者のほほえみ隊にとっても、自信を持ってこの活動を続けていける大きな後押しになると感じていたからです。

笑い講習会での ちょっと不思議な体験

笑うこと、こころから心地よいほほえみには、人を前向きにする効果がある、時には人を病気から回復させる効果すらある。そんなことを私たちは高柳先生から知識として学んできました。それは、文脈としては理解しますが、目の前で見せつけられるとこれはもう驚きの体験です。

笑いプロデューサー養成講習会では、講習のラストに3日間受講した感想を一人一人に語ってもらう時間をつくっていました。そこで、男性の参加者が「笑ってもいい、泣いてもいい、ありのままの自分でいいんだと心から思えた。このことがこんなに心地良いとは思ってもみなかった。」と泣きながら語ってくれました。

長年のリウマチで初日は片時も杖を離せずに参加していた受講生がいました。その方が3日目には、痛みが楽になったと話し、明るい色の服を身につけ、杖を使わずに過ごす様子を目撃しました。

元気に3日間を過ごした受講生の女性が、終了後、実はこの講習に来る前には、自殺を考えて、通帳なども整理していたと。でも申し込んだ講習会に行くようにと職場からせつ

つかれ、仕方なく参加した。初日に7か条の話を聞き、とにかくだまされたと思ってやってみようと、初日に、講習会場から自宅までの帰路、自分の良いところを一生懸命列挙し、かみしめながら戻ったそうです。途中、涙が出て涙が出て、運転が大変だったが、それで、自殺を思いとどまったと話してくれました。

自らを好きになり、あたたかいほほえみを浮かべ、笑うことができる、そのことが引き起こす大きな効果を、共に参加したコアも笑いもほほえみ隊も、理屈ではなく実感することになりました。

もう一つの視点

そう、こういったいろいろなことがコア笑いプロデューサーをこの取組のリーダーにしていっていると思います。そして、これらのコアが想いを込めて懸命にバックアップした3日間の講習に参加した笑いプロデューサーのうちから、その想いが乗り移ったように、地域のために共に動きたい、という仲間が生まれてきたのです。

この連鎖が、その後のほほえみ活動を支えるキーポイントでした。自分と変わらない一県民が地域を良くしようと語りかけている、それも一生懸命、そして楽しく。それを聞いていて、そして体験していて自分も楽しい、そして、自分にもできそう。よし、私もここに参加しよう、自分も役に立ちたい。この連鎖の始まりです。

さあ、コアだけでなく、初年度で5回の講習会を経て、179人（最終的には3年間で11回の講習会を経て395名になりますが）を数えることになる笑いプロデューサーを味方につけて、さらに活動が広がっていくこととなります。

この3日間講習をコアの仲間たちと繰り返し体験し、共に迷い、考え、ほほえみの7か条を自分のものにしていきながら、私はそこにどっぷりとつかっているわけにはいきません。次に向けたもう一つ別の視点が必要でした。それは、この人たちをどう組織していくか、そして次の活動を広く県民の中へ滞りなく広げていくために、私は、そしてほほえみ隊は何をしていかなければならないか、ということです。

高柳先生のもとで生まれてきた仲間たちを引継ぎ、これからは高柳先生から少しだけ離れて自分たちで育っていかなければなりません。高柳先生にはついてきてくれた仲間たちでしたが、私とも一緒に歩いてくれるのだろうか、という心配も実はかなりありました。でも、高柳先生はそのこともしっかり意識してくれていたのだと思います。各講習会の中で、必ず、この取組の青森側の発案者が私であることを繰り返し紹介し、私に、想いを語る時間を必ず作ってくれました。ですので、受講者の中には、私はそれなりの特別な存在として意識はされていました。それにしても、です。高柳先生のようなカ

リスマ性は私にはないのですから。

またひとつ、ステップアップの時期を迎えていました。

私のなすべきことは、せっかく味方についてくれた仲間たちに、ここから先、大きな失敗をさせることなく、この取組を継続したいと思ってもらえる経験を積んでもらうことだと、強く感じていました。そのために、高柳先生のようなカリスマ性で引っ張っていくことができないとしたら。私にできることは何か。それは丁寧に一人ひとりを見て、得意不得意を見きわめ、無理なく一人ひとりのできることをしてもらいながら、ステップアップしてもらえる環境をつくること。それは管理しすぎてもダメで、勝手にさせすぎてもダメなんじゃないか。そのバランスを自分は上手にできるだろうか。

きっとここから先、様々な配慮や工夫が必要になるのだろう。でも、この先どうなるかわからないモヤモヤも含め、何か動き始めた感覚が、当時の私にはとても楽しいことのように感じられていた気がします。